

[論 文]

ICTを活用した幼児教育の 内容・方法の可能性について

—白板ソフトを使用した保育者養成の実践を通じて考える—

江 津 和 也[※]

Key words：保育者養成、ICTの活用、白板ソフト

はじめに

本稿は、幼稚園や保育所における保育においてICT（情報通信技術）を取り入れた内容・方法にどのような可能性があるのかについて、幼稚園教諭及び保育士養成（保育者養成）における実践を通じて考察しようとするものである。

近年、初等中等教育においては、知識基盤社会の時代における技術的なツールとしてのICTを教育現場で活用していくことが教師に求められ、それらが国家規模で促進されている状況にある。その一方で、保育所や幼稚園においては、事務的作業の効率性を高めるためにICTが活用されることがあっても、保育の内容・方法の中にそれらが取り入れられることはほとんどない。むしろ、直接経験や双方向的コミュニケーションが重要視される乳幼児の保育においてICTの活用は避けられている¹⁾。

だが、保育士養成課程の学生の大半が併修する幼稚園の教職課程では、教育職員免許法施行規則によって、「教職に関する科目」中に「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）」があり、それを履修することが求められている²⁾。つまり、我が国における保育者養成においても、保育現場の実情はともあれ、「情報機器の活用」すなわちICT機器を活用した保育技術の習得が法令上求められているのである。

筆者は、保育原理、保育実習指導などの保育士養成課程の科目を中心に担当するかたわら、教職課程（小学校、幼稚園）の科目である「教育方法論」を分担してきたが、小学校教諭免許状取得希望の学生に向けてICT機器を活用した学校教育のあり方について講じたり、その是非について学生たちと議論したりすることがあっても、保育者を目指す学生に向けて保育の現場における

※ 淑徳大学総合福祉学部専任講師

ICT機器活用についてはこれまで全く触れてこなかった。

しかし、幼稚園の教職課程において「情報機器の活用」を取り入れていくことが法令上求められている以上、ひとまずその是非については保留としたうえで、保育現場においてICT機器を活用した保育内容・方法にはどのような可能性があるかについて考察し、学生にそれらを伝えていく必要があると考えた³⁾。

こうしたなか、小学校を中心として教師の授業展開のツールとして活用されている「白板ソフト」⁴⁾の開発者および実践者が、動く絵本を作成するなど、幼稚園や保育所等の保育においてそのソフトを活用することを提案していることを知った。筆者らは、このソフトが子どもたちの創造性を高める可能性をもっていることに注目し、これを用いて教育方法論の授業を展開することとした。

そこで、本稿では、白板ソフトを使用した教材作成に関する授業実践を紹介する。次に、その実践により作成された教材や、それに対する学生の意識について分析することを通じて、ICTを活用した幼稚園や保育所等における保育の内容・方法がどのような可能性をもっているかどうかについて考察することとしたい。

なお、本稿で研究の対象とする学生については、テーマとの関連から幼稚園教職課程及び保育士養成課程（これをあわせて以下、幼稚園教諭・保育士課程）の学生に限定する。

I 白板ソフトを活用した教材作成の授業の展開

1. 白板ソフトを用いた授業実践までの経緯

まず白板ソフトを活用して教材作成の授業を実施するにいたった経緯について述べることにする。教職課程科目としての教育方法論には「情報機器の活用」を含めることが求められているが、これまで教育方法論の授業では、大規模教室での実施ということもあり、小学校以上の学校教育段階におけるICT機器を用いた教育の状況を講義するにとどまり、学生が情報機器を活用するような内容は含めてこなかった。また、幼児教育における情報機器の活用についても触れてこなかった。

だが、今般の学習指導要領の改訂に向けた議論にみられるように、学校教育へICT機器を積極的に導入していくことが時代的な要請となっており、大学における教員養成においてもそれに応えることが求められている。それゆえ、小学校と幼稚園の教職課程の共通開設であることから受講者100名を超える授業規模であり、さらに大学における施設・設備面でも制約があるなかで、いかに教育方法論の授業内容として情報機器の活用を取り入れ、シラバスに位置付けていくべきかが担当者間で課題とされていた。

こうしたなか、特別な機器を必要とせず、既に大学に設置されているデスクトップパソコンや学生が自宅等で日々使用しているノートパソコンに導入すれば用いることができ、小学校教諭を

中心として教科の授業のツールとして活用されている「白板ソフト」の存在を知ることとなった⁵⁾。その後、2015年11月に「白板ソフト」の開発者である坂本勝氏からその概要と活用方法について説明を受けることができた。また、東京都下の小学校において終業後に実施されている現職教員の「白板ソフト」の研究会に参加させていただき、主に小学校における実践例を実際に見ることができた。さらに2016年3月には淑徳大学総合福祉学部教育福祉学科の情報化プロジェクトチームがソフト開発者と実践者を招聘した研修会で詳細に話を聞く機会を持つことができた。

これらを通じて、白板ソフトは「従来型のプレゼンテーションソフト、お絵描きソフトとそれほど変わらない機能を備えていて、拡大機能など一斉授業で日常的に使える機能」を持ちながら、「部品」という機能を持ち、「アニメーションなどを簡単に組み上げる」⁶⁾ことができるというこのソフトの特徴を理解することができるとともに、それが保育の場において取り入れられる可能性を持つものだと考えた。こうしたことで2016年度春学期の教育方法論において、情報機器の活用に関する授業内容として白板ソフトを活用した教材作成を取り入れることとした。

2. 白板ソフトを活用した教材作成の授業の展開

教育方法論（教職課程／2単位）の15回中の5コマを「情報機器の活用」の内容としてシラバスに位置づけ、「白板ソフト」を習得させるための授業を展開した（表1）。ここではシラバスに位置づけたそれぞれの授業の展開について述べることにしたい。

（1）白板ソフトの開発者及び実践者による講義

学生たちに白板ソフトを活用する技術を習得させていくにあたり、2コマを用いて、白板ソフトの持つ可能性やそれらを実際に活用した授業の展開等について、白板ソフトの開発者及授業の実践者をゲストスピーカーとして招いて授業を実施することにした。

1コマ目は、教育ネット研究所長であり、白板ソフトを用いた授業の展開についての研究会を主宰する元聖徳大学教授の木下昭一氏に「白板ソフトがひらく教育活動の可能性」というテーマで、教育方法学の立場からの講義を受けた。特に、アクティブ・ラーニングを推進していく上でソフトを活用する授業が有効であるとの指摘を受けた。

次に、白板ソフトの開発者である坂本勝氏より「白板ソフトの簡単な操作法」として、このソフトが特色とする「部品」の機能を中心に簡単な操作方法について説明を受けた。後日、演習というかたちで学生がこのソフトを用いて教材作成をすることになるが、その際初めて触れる学生たちであったが、ここで受けた説明によって基本的な動作を理解したようでスムーズに他の機能を使った操作に取り組むことができていた。

次に2コマ目は、小学校教諭課程と幼稚園教諭・保育士課程の学生とにクラスをわけて、それぞれ小学校における授業の展開、保育現場における実践についての実演を観察するとともに、そこで使われた教材の作成手順について説明を受けた。小学校クラスでは、東京都公立小学校教諭の小山万作氏によってソフトを用いた算数や国語の授業の実践と説明がなされた。説明のなかで

表1 シラバス（第5～6回、第12～14回）

第5回	
事前学習	ICTを活用した教育方法について自らの考えを800字程度でまとめる。
授業内容	ICTを活用した教育方法について学ぶ（1）—ゲストスピーカー白板ソフト開発者による講義—
事後学習	授業を振り返り、グループで話し合ったことや自らの考えを指定したレポート用紙にまとめる。
参考文献等	株式会社マイクロブレイン HP の URL http://www.mbrain.com

第6回	
事前学習	テキストを読み「白板ソフト」の概要について理解しておく。
授業内容	ICTを活用した教育方法について学ぶ（2）—ゲストスピーカー白板ソフトを活用している教員による授業実践例の紹介—
事後学習	授業を振り返り、グループで話し合ったことや自らの考えを指定したレポート用紙にまとめる。
参考文献等	株式会社マイクロブレイン HP の URL http://www.mbrain.com

第12回	
事前学習	授業を実際におこなうための計画（学習指導案）をたてる。
授業内容	授業の実践（2）グループにわかれて白板ソフトを活用した教材開発を行う。
事後学習	授業を振り返り、グループで話し合ったことや自らの考えを指定したレポート用紙にまとめる。
参考文献等	教育ネット研究所編『楽しい授業をつくる～「白板ソフト」を使って』（青山社）

第13回	
事前学習	白板ソフトを活用した教材開発を進めておく。
授業内容	授業の実践（3）グループにわかれて白板ソフトを活用した教材開発を行う。
事後学習	授業を振り返り、グループで話し合ったことや自らの考えを指定したレポート用紙にまとめる。
参考文献等	教育ネット研究所編『楽しい授業をつくる～「白板ソフト」を使って』（青山社）

第14回	
事前学習	グループごとに発表練習をしておく。
授業内容	教育方法の発表 グループごとに授業計画と作成した教材を発表をする。
事後学習	授業を振り返り、グループで話し合ったことや自らの考えを指定したレポート用紙にまとめる。
参考文献等	教育ネット研究所編『楽しい授業をつくる～「白板ソフト」を使って』（青山社）

は発達障害を抱えた児童への指導にあたって、このソフトを用いたことにより学習が深まった事例などが紹介された。特に、特別支援学校の教職課程を併修する学生たちに影響したようで、後日の演習では発達障害のある子どものための教材を作成するものが多いた。

幼稚園教諭・保育士課程のクラスでは、マイクロブレイン社の坂本保子氏と東京都公立小学校教諭の片柳木ノ実氏による保育現場で活用が期待される動く絵本や、子どもたちが作成した作品の紹介があった。また、これらの実践とともに、こうしたソフトなどが必ずしも否定されるべきでなく、使い方によっては保育を豊かにしていく可能性があるという指摘がなされた。後述するように、幼稚園教諭・保育士課程の学生たちは当初、保育の現場においてICT機器は必要ないとの認識をもっているものが大半であった。しかしながら、この機会を通じて、また実際に自分たちで作品を作ることを通じて、子どもたちの創造性を高めるなどの可能性があるとの認識を持つようになっていった。

(2) 白板ソフトを用いた教材の作成、発表

次に、2コマ分の授業時間にくわえて事前・事後の学修時間を活用し、白板ソフトを実際に用いて技術を習得させるための授業をパソコン演習室にておこなった。この授業を実施するため事前にソフトのライセンスを取得し、学生が使うことのできる共用のパソコンに白板ソフトのインストールをおこなった。

教材作成をするにあたってまずは、白板ソフトのテキスト（教育ネット研究所編『楽しい授業をつくる』）に掲載されている作成事例を手本として一つ取り上げ、それを作成手順にもとづき再現する演習をおこなった。ほとんどの学生たちはこれによって基本的な動作を習得することができていた。

次に、小学校教諭課程もしくは幼稚園教諭・保育士課程のどちらかから構成される4人前後のグループごとに、それぞれの進路に応じたテーマを決めオリジナルの教材を作成する演習をおこなった。教科等にはとらわれず、テキストを参考にしつつも内容を自由に作成してよいこととした。オリジナルの教材については多様なものが作成されたが、後に幼稚園教諭・保育士課程の学生が作ったものを紹介するとともに、ここから保育内容・方法としてICT機器を用いることの可能性について述べることにしたい。

このようにしてグループごとに作成した教材については、全グループが全体の前で作成した作品をプロジェクターで投影しながら、ポイントの説明や実演をおこなう発表会をおこなった。それを受けて全体で講評があった。最後にレポートとして教材作成を通じて、ICT機器を活用した教育や保育のあり方について考えたことを記述させた。

Ⅱ 研究の方法

以上、教育方法論における白板ソフトを活用した教材作成の授業の実践について述べてきたが、次にICT機器を活用した幼児教育における内容・方法の可能性について検討するため、この授業の展開を通じて、幼稚園教諭・保育士課程の学生のICTに対する意識がどのように変化したか、また作成した教材はどのようなものであったかについて考察することとしたい。

1. 調査対象

教育方法論（幼稚園、小学校）の履修者130名のうち、幼稚園教諭・保育士課程学生50名を対象とした。性別、学年については図1の通りである。

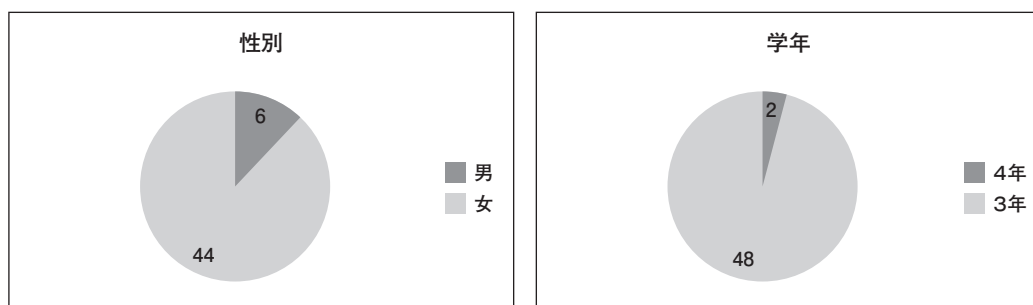


図1 保育者養成課程の学生

2. 調査期間

教育方法論の全15回のうち「情報機器の活用」としての内容を取り扱った5コマとその前後を調査期間とした。

3. 調査内容

白板ソフトを用いた授業の実施前後にICTを活用した幼児教育・保育についての認識などについて調査を以下のように実施した。

- ・事前 ICT環境、活用環境、ICTを活用した教育を受けた経験およびICTを活用した保育に対する意識（質問紙）
- ・事後 ICTを活用した保育のあり方についての意識（レポート記述）

4. 分析方法

質問紙を集計するとともに、その自由記述欄に記述された内容について検討した。これによって幼稚園教諭・保育士課程の学生たちが、白板ソフト開発者及び実践者による講義を受け、また白板ソフトを活用したオリジナルの教材作成を通じて学生たちがどのようにとらえ意識の変化があったのかを考察する。また、学生たちがどのような教材を作成し、それを保育の現場においてどのように活用しようとしたのか分析する。

Ⅲ 結果と考察

1. 幼稚園教諭・保育士課程の学生たちのICT環境と意識

(1) 幼稚園教諭・保育士課程の学生のICT環境

白板ソフトに関する授業を実施する前に、幼稚園・保育士課程の学生のICT環境に関するについていくつか問うた。

まず、学生のICT機器の保有状況については図2の通りである。ほぼすべての学生がスマートフォンを所持しており、8割の学生がノートパソコンないしはデスクトップパソコンを保有している。タブレット端末を所持しているものは極わずかであり、それ以外の機器を有していると回答したものはなかった。スマートフォンの所有率については我が国の携帯電話の普及状況から見れば当然なことである。パソコンについては、レポート作成や電子メールでの連絡など大学の学習に必要なことから高い所有率となっているのであろう。だが、それらの機器を自由に操作できるか問うたところ約半数強のみが「そう思う」と回答するにとどまった。

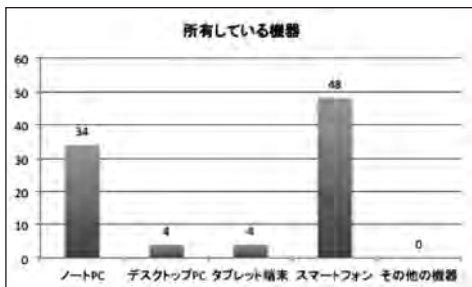


図2 ICT機器の所有状況 (n=50)

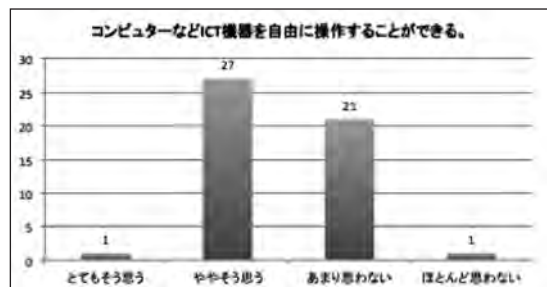


図3 コンピューターの自由な操作 (n=50)

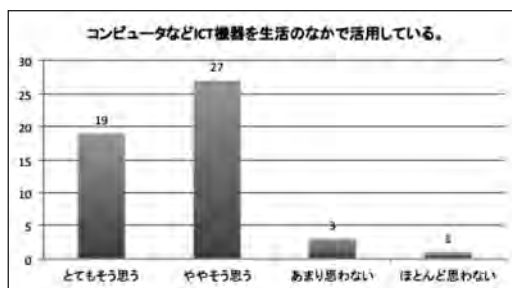


図4 生活のなかでの活用 (n=50)

また、「コンピューターなどICT機器を生活の中で活用しているか」という設問に対しては大半の学生が「そう思う」という回答した(図4)。これは、スマートフォンにインストールされる様々なアプリケーションを活用したり、SNSで他者と連絡を日々取り合ったり、情報を得たりする。また、大学の教学システムを用いて各種手続きをおこなったり、連絡事項を確認したりし

ていることから、このような結果になったものと推察される。

以上のように、対象とする幼稚園教諭・保育士課程の学生たちはスマートフォンやパソコンといったICT機器を所持し、生活のなかで日々身近なものとして活用しているのである。それゆえ抵抗なく白板ソフトを用いた教材作成をおこなうことができたといえる。

(2) ICT機器を活用した教育を受けた経験

さて、幼稚園教諭・保育士課程の学生たちが大学教育を受ける以前においてICT機器を活用した教育を受けた経験はどのようなものだったのだろうか。高等学校については普通科と専門学科とでは相違があるので、小学校、中学校時代の経験に限って「電子黒板、PC等のICT機器を活用した授業を受けてきた」かどうか問うた(図5)。この結果、半数が「思わない」と回答している。こうしたことから対象学生が在籍した小・中学校によって情報化の程度に大きな差があったものと推測される。「そう思う」と回答した学生たちの自由記述をみると「インターネットを活用した調べ学習」「文集の作成」などがあげられていた。

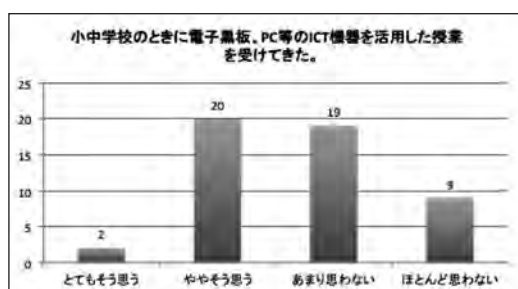


図5 ICTを活用した授業の経験① (n=50)

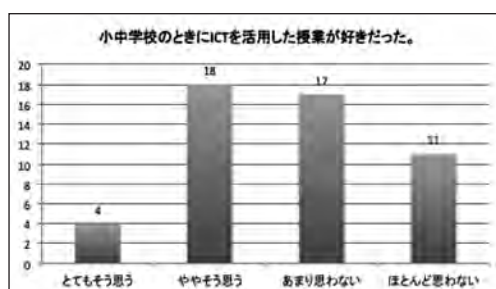


図6 ICTを活用した授業の経験② (n=50)

また「小中学校のときにICTを活用した授業が好きだった」と問うたところ、図6のように「そう思う」と「思わない」が約半数ずつとなった。すなわち、自らの教育経験を振り返ったときにICTを用いた教育に否定的にとらえるものと、肯定的にとらえたものが半分ずついることを示している。

(3) 保育の現場でICT機器を活用することに対する認識

それでは、幼稚園教諭・保育士課程の学生は、幼稚園や保育所などといった保育の場においてICTを活用することについてどう思っているのだろうか。「幼稚園や保育所などでコンピューターを使った保育をしてみたいと思う」かどうか聞いたところ、図7のように「とてもそう思う」と回答したものは全くおらず、「ややそう思う」と回答した学生が3割であった。一方、7割の学生が「思わない」と回答し、保育の現場でICTを活用することについて否定的であることがわかった。

さらに、「幼稚園や保育所など保育の現場においてICT機器を活用した保育にどのような可能性があると思いますか(あるいはないとおもいますか)」に関して自由記述を求めたところ、50

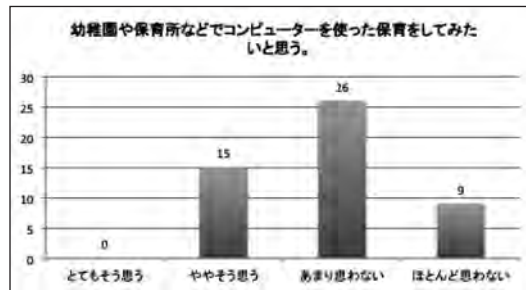


図7 ICTを活用した保育をしてみたいか (n=50)

名のうち38名が回答した。その自由記述では「子どもが意欲的に参加してくれ、楽しいと思う」、「本物の動物が歩いている姿や、普段あまり目にするもののないものを見れたし、興味を引くことができそう」、「動く絵本を作成することで、想像力やイメージを膨らませることができる」などの可能性をあげる者がいた。

だが、幼稚園教諭・保育士課程の学生の大部分は、可能性は「ない」と記述した。例えば、「幼いうちからインターネットやタブレット端末に触れると刺激が強い。自然物に触れたほうがよい」、「保育の現場では、自然を使ったものを使った方が子どもの成長に良い影響を与えることができる」と考えるため、あまり使わないほうがよいと考える、「子どもの健康状態への悪影響も考えられるし、保育においてICT機器を使用する必要性はあまりないと思う」などと記述し、ICTの活用が子どもの成長・発達に悪影響を与えたり、それが子どもの実体験を阻害することにつながることをあげていた。

つまり、幼稚園教諭・保育士課程の学生たちの多くが自らは抵抗なくICT機器を受け入れ、自らの生活で活用しているが、乳幼児の保育においてICTの活用は避けるべきで、必要がないと考えていたのである。これは幼稚園教諭・保育士課程の学生たちが保育に関わる授業や保育実習などを通じて、直接経験や双方向的なコミュニケーションに高い価値を置く保育のあり方をきちんと学習してきたためであると考えられる。

2. 授業後レポートに見る学生の認識

幼稚園教諭・保育士課程の学生たちは、教育方法論の授業において白板ソフトの開発者及び実践者による講演を聞き、そして実際に白板ソフトを用いて教材を作成し、互いにそれを発表しようという体験を通じてそれらを活用することについてどのような認識を持ったのであろうか。これら一連の授業後に学生たちが提出したレポートに記述されたコメントから考察することとしたい。

レポートのテーマは、「白板ソフトを活用して考えたこと」とした。幼稚園教諭・保育士課程の学生50名のうち、レポートの中で保育における白板ソフトの活用について触れていたのは24名であった。そのうち、保育における白板ソフトの活用の可能性を感じるなどの肯定的な記述をし

た者は19名であった。一方、保育ではやはり必要ないなどと否定的な考えをもっていた者は4名にとどまった。実際に自ら考え、保育のための教材を作成する体験を持つことを通じて、これまで持っていた悪影響があるというイメージからくる否定的な見方とは違って、保育においても内容や方法によっては活用していく可能性があると思うようになった学生が多くなっている。

(1) 学生のコメントにみる保育の場での可能性

白板ソフトを使って保育のための教材を作成する体験を持つことを通じて、保育の場で活用できる可能性があると考えようになった学生たちは、どのような部分に可能性を感じたのだろうか。

例えば、「一つのソフトでここまで沢山の工夫ができるということに驚き、また保育の場でもさらに活用していきたいと考えた」、「様々なものがあり、手遊びやパネルシアターなどを白板ソフトに取り入れる考えがなかったので絵本以外にも他の考えがあったのだと気付きました」、「活用の仕方は多様であって、機能をもっと知って工夫することで保育でも絵本やパネルシアター以外に活用法が見つかるだろう」などの記述にあるように、いろいろな機能を持っていることから、さまざまな創意工夫が可能であり、保育の場における幅広い活動に取り入れることができると感じたようである。

また、「絵本のソフトの発表を見て、いつも見ている絵本の中の動物や人が動くだけで楽しさを味わえる」、「動く絵本は子どもたちの興味をひくと思う」などと、動きのある画像を示す効果などによって、子どもたちの興味、関心を惹きつける点に着目している。

また、活動によって「絵本を教材にし、ただ読むだけではなく、物や人に動きをつけることで普段とは違う活動ができる」、「保育の場面での活用の機会があまりないと思っていたが、絵本を作成し、アニメーションをつけることによって、絵本にはない違った良さがあらわれると思った。パネルシアターのようにになるので、キャラクターが動く楽しさや、変化を楽しむことができる。想像力をふくらませたり、お話の世界に入り込むなど、白板ソフトを使うことで絵本の様々な楽しみ方ができるといった」と、ソフトを活用することによって、子どもたちのイメージーションを豊かにするような新たな活動が創造できる可能性を感じた学生たちもいた。

(2) どのように活用していくか

保育の場においてソフトをどのように活用していくべきか、その考えをコメントした学生もいた。例えば、「自身の主観だけでなく、子どもにとってどうか考え白板ソフトや教材を活用していかうと思った」、「子どもたちが楽しめる教材を考え、つくっていかうと思った」と、当然のことであるが、ソフトありきではなく、子どもを主体として活用することを確認している。保育の基本についての正しい認識をもっているからこそ出てくるコメントといえる。

また、「白板ソフトで保育や授業を展開するときに、視覚的に楽しむことができたり、興味関心を引きつけること、集中力を高めることなど、幅広いメリットを感じた。保育や授業展開で、適切に取り入れることで、教育の可能性は広がっていくだろう」、「アニメーションをつけることで視覚的によくなることもあるが、なくてもいい場合もあると感じたため、用途に応じて活用し

ていきたいと思った」と述べるなど、ただ活用するのではなく、適切な場所や時、内容を吟味した上で活用していくことが大切だと考えたようである。さらに、小学校教諭課程の学生が特別支援教育向けに作成した教材をみて、障害をかかえる子どもたちのために活用できる、と述べた学生も少なくなかった。

(3) 保育の場において活用することへの戸惑い

小学校や特別支援学校において活用することは望ましいが、やはり保育の場においては必要ないと考える学生もいた。ただ、成長・発達への悪影響があったり、実体験を阻害するという否定的なイメージから「必要ない」とコメントしているのではなかった。実際に教材作成をおこない、さらに発表をするという体験を通じて、白板ソフトの持つメリットを感じながらも、保育実習等で見てきた保育の現場を思い浮かべて、「子どもたちや保育士には使いづらく、保育では使わない」、「保育の現場では少し難しいと感じた」と述べているのである。

また、「絵本や玩具についてもよく教材を研究し、子どもに提供することが大切だと知った。既存のものを白板にできるだけでなく、オリジナルの物語を簡単に作れることに魅力を感じた。(中略) もっとたくさんの白板ソフトの作品をみて、活用の仕方や機能を知りたい。また、実際に保育現場で利用しているところがあるなら知りたい」というコメントがあった。ICT機器を保育に活用することに魅力を感じながらも、実際にそれらを用いて保育実践している幼稚園や保育所等の実践の事例を大学における授業で紹介されることもなく、また保育実習において実践を実際に見たこともないことから、このように述べたのだろう。筆者らは本年度の教育方法論の授業においてICTの活用について取り扱いながらも、実践の事例を紹介することはできなかったので反省すべき点である。今後、学生たちに事例を紹介できるよう、幼稚園や保育所等と連携してICTを活用した保育実践について探求していきたいと考えている⁷⁾。

授業後レポートを見る限り多くの幼稚園教諭・保育士課程の学生は、白板ソフトを活用した教材作成を通じて、保育においても、目的、内容を吟味した上でICTを活用していくことに意義を見出すようになったものと思われる。

3. 幼稚園教諭・保育士課程の学生が作成した教材

幼稚園教諭・保育士課程の学生が作成した教材について分類することとしたい。先に述べたゲストスピーカーによる講義を通じて、教材作成の演習に入る前に、幼稚園や保育所向けの教材として「動く絵本」が紹介されていた。だが、幼稚園教諭・保育士課程の学生たちは、それにとどまらず様々な機能を用いて創意工夫した教材を作成した。大きく分類すると以下(1)～(4)の物を作成した。

(1) 動く絵本

動く絵本は、白板ソフトの「部品」機能をもちいたアニメーションを取り入れたものである。既存の絵本や物語をもとに作成したグループがあれば、オリジナルのストーリーを考えて作成し

たところもあった。既成の画像データを用いることもできるが、ほとんどのグループは自ら描画して製作していた。また、紙芝居のような展開のある作品もあった。特に、オリジナルな絵本が作成できるというのは魅力的な要素である。

(2) パネルシアター

パネルシアターの代用として作成されたものである。画面をパネル布にみたくて、ソフトの「部品」の機能を使って絵を貼り付けていくというものである。実際のパネルシアターとは異なり、プロジェクターを使ってスクリーンに投影することができるため、園の行事等において多くの子どもたちの前で演じることができる。また、複雑な作品でも単独でおこなうことができる可能性がある。



(3) 歌あそび

幼稚園や保育園等において、子どもと歌を歌う際に、歌詞をスクリーンに投影するためのものとして作成されたものである。歌詞だけではなく、関連する絵やアニメーションをつけたものもあった。歌詞に描かれた世界のイメージを子どもたちに伝えることができるなどのメリットがある。



(4) その他

その他、クイズ形式で子どもたちに交通安全のためのルールを教えるための教材や、アニメーションをつけて年中行事の由来を効果的に子どもに伝えるための教材など、創造性豊かな作品を学生たちは作成していた。

保育の場における実践の事例がほぼない中、幼稚園教諭・保育士課程の学生たちが創意工夫を凝らして作成した作品は、授業や実習を通じて保育の基本を理解した上で創られたものであり、今後、幼稚園や保育所等で活用されていく可能性を持ったものだと考える。

おわりに

保育の対象となる乳幼児期の子どもにとって周囲の環境との直接的な関わり合いが重要なことはいうまでもない。だが、今日 ICT 機器は子どもにとって日常生活にある環境の一つとなっていることも事実である。

白板ソフトを使って学生が様々な作品を創りあげることができたように、ICT 機器は子どものイマジネーションを豊かにできる可能性をもっている。それゆえ実際に ICT を保育現場に導入するかどうかは別として、最初から「悪玉」としてのイメージにもとづきその活用を拒むのではなく、幼稚園教諭・保育士課程の学生たちに、どのように活用できるのか、どのような可能性をもっているのか自分で考え、実際に教材作成するなどの経験をさせていくことは必要であると考ええる。すなわち 21 世紀の保育者養成では、ICT を活用した保育内容・方法について、望ましいかわり方も含めて教授しておく必要がある。

特に本稿で紹介した授業実践のような演習などを通じて、ICT を用いた保育の特性がわかり、どのような場面で活用できるか、またそれがどのような意味をもつのか、学生たちに考えさせていくことが重要であるといえる。その意味で、教育方法論の授業内容として「情報機器の活用」を含めることを法令が求めていることを積極的にとらえたい。

今後の課題として、保育の現場における ICT を活用した保育のあり方について、幼稚園や保育所等と連携して探求していきたい。

* 本研究は平成 28 年度淑徳大学学術奨励研究助成を受けて実施した研究の一部である。

【注】

- 1) 内藤知美「子どもを取り巻く文化」日本保育学会編『保育学講座 3 保育のいとなみ 子ども理解と内容・方法』（東京大学出版会、2016 年）、170 頁。ここで内藤は子どもが「ものと関わりながら」自分たちの発想で自由に遊ぶことを保証するため、保育界では活用される児童文化財は一般にシンプルなほうがよいとの考えがあることを指摘している。
- 2) 教育職員免許法施行規則第 6 条。
- 3) ICT を活用した幼児教育・保育をどのように捉えるべきか考察した論稿として以下のものがある。田爪宏二・西山 修「保育者養成課程の短期大学生における保育にコンピュータを用いることに対する認知—保育観および情報機器に対する適応との関連からの検討」『鎌倉女子大学紀要』第 9 号（2002 年）、星野英五「新しい保育実践（情報機器活用）と保育者養成」『名古屋芸術大学短期大学部研究紀要』第 35 号（2003 年）、中平浩介・大橋伸次「保育におけるコンピュータ活用の可能性について—保育職志望学生の認識」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』第 24 号（2003 年）、橋本弘道「保育者養成における情報機器の操作に関する教育方法論」『鶴見大学紀要』第 46 号第 3 部（2009 年）、副島（足立）里美「保育方法としての情報機器導入に関する検討—学生のアプリ体験を通じて再考する」『岐阜聖徳学園大学教育実践センター紀要』第 15 号（2006 年）。これらの研究では、幼児教育・保育の現場において情報機器を

活用した実践の事例が乏しいことから、保育者養成の実践を通じてICT機器をもちいた幼児教育・保育のあり方を考察している。

- 4) 「白板ソフト」(マイクロブレイン社)は、小学校を中心とした教科の授業のツールとして主に活用される汎用性の高い教育ソフトである。このソフトを用いて、坂本保子氏、片柳木ノ実氏らが、動く絵本を作成するなど、幼稚園や保育所等の保育においても活用することが提案されている。筆者らは、定型的な教材作成パターンが組み込まれたソフトではなく、使用する者の創造性を生み出し、活用方法も多様に開発することが可能となりうることから「白板ソフト」に着目した。教育ネット研究所『楽しい授業をつくる～「白板ソフト」をつかって』(青山社)、「白板ソフトクラブ」ウェブサイト(教育ネット研究所) <http://ien.tokyo/> に詳しい。
- 5) 松山恵美子教授のご教示により「白板ソフト」の存在と、それを用いて実践している方々のことを知ることができた。
- 6) 教育ネット研究所、前掲書、79頁。
- 7) 全国保育士養成協議会第55回研究大会(2016年8月、盛岡市)において本論の一部をポスター発表のかたちで発表した。その際、青森県にある幼保連携型認定こども園の園長に興味関心を持っていただき、その園において学生の作成した教材を保育の中に取り入れてもよいとの申し出をいただいた。この実践を観察していくことを通じて保育現場における活用のあり方について探求していきたいと考えている。